

「婚宴」のたとえ

マタイ福音書 22:1-14

(そのとき、イエスは祭司や民の長老たちに) たとえを用いて語られた。

「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。そこでまた、次のように言って、別の家来たちを使いに出した。『招いておいた人々にこう言いなさい。「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。」』しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。そして、家来たちに言った。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。」

王が客を見ようと入って来ると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。王は、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか』と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」

つい先日、皇室の結婚式があり披露宴が開かれました。なかにはドタキャンした客もいたかもしれませんが、多くの招待客はよろこんで出席したとおもいます。さて、きょうのテキストは天の国の王子の結婚披露宴に招かれた客のたとえです。福音書のたとえ話にはありえない話が多いのですが、きょう

もちよつとへんな話になっています。

結婚披露宴に招いていた客が来ない、招待客のところに再三家来を送って催促してもやれ畑に行くだの商売に行くだのと云ってぐずぐずしている。そのうちに催促にいった家来を殺してしまう不届き者もでてくる。王は怒ってその人殺したちを滅ぼし、町を焼き払ったと書いてあります。そして次に誰でもいいからつれて来いと命じ、家来たちは善人、悪人の区別なく連れてきて席は埋まり披露宴は盛大に行われました。これでたとはえは終わりかと思うと最後にまた不可解なことが語られます。「婚礼の礼服」についてです。ようは服装がだらしない客がいたので天の国からほおりだした、これは地獄行きを暗示します。そしてテキストは11節の「**招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない**」というおっかないことばで締めくくられます。

「イエスは、また、たとえを用いて語られた 22:1」とあるのですから登場人物はなにかにたとえられています。ふつう最初に招かれていた客たちはユダヤ人と解釈されています。誰でもいいからといってつれてこられ、実際に披露宴に出席した人たちは異邦人、ユダヤ人ではない人々（わたしたちも含まれる）をたとえています。ユダヤ人は王子の（つまりイエスの）披露宴の出席を拒んだ、怒った王は異邦人たちを招いた、招待された異邦人が救いにあずかった。きょうのたとえ話はこのように単純に解釈することもできます。

でも疑問が出てきます。なぜ招かれていた客は出席を拒んだのか、また彼らが家来殺しをする理由とは、報復として町まで焼き払ったのはどうして、なぜ王は婚宴を中止しないで決行したのか、誰でもいいからつれて来いととはどんな意味なのか、礼服を着ていない客はなぜ暗闇にほうりだされるのか、などなどけっこうわからないことがでてきます。

先日の皇室の披露宴に話は戻りますが、スピーチが終わったらそそくさと席を立ち次の用事に出かける人、招かれて出席してはみたものの他に重要な案

件があるので時間ばかり気にしてそわそわしている人、たぶんこんな人たちもいたはずです。このような披露宴に招かれる重要人物は多忙にきまっているからです。もちろん心の底から嬉しくて我がことのように喜んだ人たちによる良い宴席だったことでしょう。

また仮定の話ですが、ロシアの大統領、韓国の大統領、アメリカの大統領、イギリスの女王を招いたとしてハイハイと出して出席する人はいるでしょうか。いないと思います。また各国の主席に招待状を届ける日本の大使（家来）たちも本国からの理不尽な命令に腰が引けるでしょう。日本の皇室はあくまで日本の王家であって世界の王ではないのですから身内に祝ってもらえばそれで充分いいわけです。

ユダヤ人は神から祝福を約束された民です。主はアブラハムに約束しました。

主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。創世記 15:5-6

アブラハムはそれはそれは嬉しかったと思います。これは聖書に記されている神からの祝福のひとつです。

プラネタリウムにいくときよの星空と出してスクリーンに満天の星が写しだされます。ときに茶目っ気のあるオペレータは実際に見えるのはこうですとか言って、星の数を減らします。というか、まわり風景を明るくして4等星以下の星が見えなくなるように操作します。けっして星を消しているわけではないのです。まわりを明るくしているだけです。このままだと、プラネタリウムのプログラムが進まないでオペレータはすぐに満天の星空にツマミ一つで戻します。まだわたしは見たことがないのですが、プラネタリウムの投光機の全能力をつかって、今、人類が見ることができる（電波望遠鏡などをつかって）すべての星をドーム上の仮の夜空に映し出したならそれはさぞかし明

るいこの世のものとは思えない光景になるのではないのでしょうか。

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。ヘブル 11:1-3

たとえの中の招待客は自分たちの目に見えるものに囚われていた、だから王子の婚姻が目にはいらなかった。無視した。

人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった。22:5-6

畑、商売、彼らはこっちが大事なので無視したとあります。これはどっちが大事というだけの話ではありません。大事、大事じゃないという比べ方をすること事態がすでになにも見えていないということです。「見えるものは、目に見えているものからできたのではない」これがヘブル書に書いてある真理のことばです。

婚宴に行かないユダヤ人とはけっして他人事ではない、わたしたちの中にも畑、商売を優先して大切なことを無視する傾向はないとは言い切れないのではないのでしょうか。疑問はまだあるのですが、残りはまたの機会に。
